

## 形見の文

紫の上を失った光源氏は、移り変わる四季の風物全てに心を痛め、追憶のみに日々を送る。一周忌も過ぎ、年の暮れが迫る頃、光源氏は出家の意志を固めていた。

今年をばかくて忍び過ぐしつれば、今はと世を去り給ふべきほど近く思しまうくるに、あはれなること尽きせず。やうやうさるべきことども、御心の中に思いつづけて、候ふ人々にも、ほどほどにつけて物賜ひなど、おどろおどろしく、今なむ限りとしなし給はねど、近く候ふ人々は、御本意遂げ給ふべき気色と見奉るままに、年の暮れゆくも心細くかなしきこと限りなし。落ちとまりてかたはなるべき人の御文ども、「破れば惜し。」と思されけるにや、少しづつ残し給へりけるを、ものついでに御覧じつけて、破らせ給ひなどするに、かの須磨のころほひ、ところどころより奉り給ひけるもある中に、かの御手なるは、ことに結ひあはせてぞありける。自らしおき給ひけることなれど、久しうなりにける世のことと思すに、ただ今のやうなる墨つきなど、げに千年の形見にしつべかりけるを、見ずなりぬべきよと思せば、かひなくて、疎からぬ人々二人、三人ばかり、御前にて破らせ給ふ。

いと、かからぬほどのことにてだに、過ぎにし人の跡と見るはあはれなるを、ましていとどかきくらし、それとも見分かれぬまで降り落つる御涙の水茎に流れそふを、人もあまり心弱しと見奉るべきがかたはらいたうはしたなければ、押しやり給ひて、

死出の山越えにし人を慕ふとて跡を見つつもなほ惑ふかな

候ふ人々も、まほにはえ引き広げねど、それとほのぼの見ゆるに、心惑ひどもおろかなならず。この世ながら遠からぬ御別れのほどを、いみじと思しけるままに書い給へる言の葉、げにその折よりもせきあへぬかなしさやらむ方なし。いとうたて、いま一際の御心惑ひも、女々しく人わろくなりぬべければ、よくも見給はで、こまやかに書き給へるかたはらに、

かきつめて見るもかひなし藻塩草おなじ雲居の煙とをなれ  
と書きつけて、みな焼かせ給ひつ。

【口語訳】

(光源氏は) 今年をこのように悲しみを堪えて過ごしてきたので、今はもうこれまでと(お考えになって) 出家をなさるだろう時期が近いとあらかじめ心づもりし用意をなさると、感慨深いことは尽きない。だんだんと出家の前にするべきさまざまな準備を、お心の中でお考え続けになって、お仕えしている女房たちにも、身分に応じて形見の品をお与えになるなどして、大げさに、これが最後だというふうにはなさらないが、身近にお仕えする女房たちは、出家のご宿願をお遂げになりそうな様子と拝察するにつれて、年が暮れていくのも心細く悲しいことこの上ない。

死んだあとに残ると体裁が悪いような女性たちからのお手紙を、「破り捨てる惜しい。」と(光源氏は) お思いになったのか、少しずつ残していらいっしやったのを、何か他のことをする折にお見つけになって、破らせなさったりしている、あの(失脚して) 須磨に退去していたころ、あちこち(の女性たち) から差し上げなされた手紙もある中に、あの(紫の上の) 御筆跡であるものは、特に結わえまとめてあった。ご自分でなさっておかれたことであるが、長い時間がたった時代のこととお思いになると、たった今書いたような墨の付き具合など、ほんとうに千年の後にも伝える形見の品にきつとすることができそうであったが、(出家をしたら) 見なくなるだろうよとお思いになると、(残しておく) かいもないので、親しい女房たち二、三人ほどに、おそば近くで破らせなさる。

まったく、このようでない間柄の(人の場合の) ことできえ、亡くなった人の筆跡と思うのは感慨深いものだが、(この紫の上の場合は) なおさらいっそう目も暗くなり、それと見分けることもできないほど降り落ちるお涙が筆跡に沿って流れ落ちていくのを、女房もあまりに気が弱いと拝見するだろうことが(光源氏は) 恥ずかしくきまりが悪いので、(手紙を) 押しやりなさって、

死出の山を越えていってしまった人を慕っていこうとしてその足跡を辿るように、筆跡を見ながらもやはり心が乱れていることだ。

お仕えする人々も、(紫の上の手紙を) きちんと引き広げることはできないが、それ(紫の上の筆跡である) とわずかに見えるので、心の乱れも並ひとおりではない。同じこの世のことで、遠くはなかった(須磨と都との) お別れの距離を、ひどく悲しいとお思いになったままにお書きになった言葉で、ほんとうにその時よりも堪えかねる(死別の) 悲しさは晴らしようがない。たいへんに情けなく、これ以上のお心の乱れも、女々しく体裁が悪くなってしまいそうなので、よくもご覧にならないで、(紫の上が) こまやかにお書きになった隣に、

かき集めて見てもかきがないことだ。藻塩草(手紙) も焼かれて亡き人と同じ雲の上の煙となるがよい。

と書きつけて、すべて焼かせておしまいになった。